

Title	現代日本の精神的位相と宗教の課題
Author(s)	村松, 晋
Citation	聖学院大学論叢,17(3) : 113-125
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=125
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

現代日本の精神的位相と宗教の課題

「起越性」をめぐる一考察

村 松 晋

A study of the Spiritual Phase in Modern Japan and its Religious Problem:
Focused on Transcendancy

Susumu MURAMATSU

The purpose of this paper is the solution of the religious problem in modern Japan. The conclusion of this study is that the most important task of religion in modern society is to have theology and a prophetic existence to keep transcendancy.

問題の所在

今から10年前、「戦後50年」が焦点となった1995年という年は、思えば宗教が議論された一年でもあった。いうまでもなく、あるカルト教団が引き起こした史上稀なる惨劇に、端を発する現象である。この教団が含意する問題群と対峙することは、文字通り「現代と宗教」を考える上で不可欠な試みであるだけに、これまで多彩な議論が展開されてきたことは記憶に新しい。爾来、10年を閲するなかで、蓄積された論考を顧みてみると、語り手の多さとは裏腹に、かの教団が照射する問題は、いまだ「問題」として十分に意識されていない印象を受ける。

無論、「宗教学者」をはじめとする、いわば「専門家」の手になる論考は、少なからず公にされてきた。そこで明らかにされた見解には学ぶべき点も少なくない。しかしそうした学問の、「価値中立的」かつ「客観的」なスタンスは、価値判断をいわば「棚上げ」にした分析である点で、かの教団が胚胎する問題群の思想的総括を、結果的に遅らせることになったと思われる。

求められるのは、10年前の「事件」の意味を、「精神の深み」から問い質し、現代における宗教が、まさに「現代における宗教」であるゆえに銘記すべき、自身の課題を明示することにある。本稿は、その課題を詳らかにするために起稿される。それは「宗教学」の学問的フレームを、必ずしも意識・踏襲するものではなく、加えて以下に見るように、考察の対象も網羅的ではないだけに、件の分野で展開される、一般的な論考とは趣を異にするかもしれない。しかし、上の叙述が示唆するご

Key words; religion, cult, modern Japan, transcendancy, post modern

とき、筆者の実存的・主体的立場からする関心は、逆に、一連の論考がカバーしえない領域に相渉るものとして、固有の任を果たしうると考えている⁽¹⁾。

現代日本における「呻き」の原基

本稿では考察の対象として、件のカルト教団の幹部連に焦点をあてることとする。彼らは「信」のために国禁を犯すほど、「筋金入り」である点で、その軌跡は信者たちの実存を、最も先鋭的に照射するものと考えられるからである。

幹部の多くは10年前、20代後半から30代半ばの年齢にあっていたが、彼らの内面をあとづけるべく、この世代が直面する共通な原体験を探求してみると、まず第一に、それぞれの「就業体験」が、分析の対象としてクローズアップされてくる。すなわち、仕事の日々を通じて思い知らされた、ある決定的な「出来事」が、彼らをして職をなげうたせ、「信」の道を行かしめたのではないかという推測である。

この点に関しては、実は彼ら自身が語るところでもあって、たとえば研究職を経てきた幹部の一人は、精神的発達の伴わぬ技術開発では、世界が戦場になるだけだと、職場に見切りをつけた理由を述べ、かわりに信仰者として生きることで、21世紀に向けた意義ある役割を担いたくなると話している⁽²⁾。

こうした説明は、彼に限らず、多少の異同を含んで他でも述べられている。しかし、物質的享楽に偏った現代消費文化に対する論難や、価値意識を欠落させた科学技術の自己展開への警告は、従来より指摘されてきたところであり、またそうした論者が必ずしも「宗教」へと行き着くわけではない。この点を考えれば一連の弁明が、必ずしも「真相」を語るものでないことは明白である。

そもそも信ずるとは、「信ずる」としか言いようのない一つの断行であり、その意味で、理屈を越えた飛躍である。そうである以上、やはり「尋常」な行為ではないのであって、「決断」の背後には、その人を「飛躍」させるに足るだけの、何か切実な体験があると見るべきである。

かのカルト教団に連なった者たち、ことに犯罪にまで手を染めた幹部連たちは、その多くが「高学歴」であり、また「一流企業」に勤めていた人も珍しくないことは、再三指摘されてきた。人は普通、それらの肩書が、堅固な「抛り所」たりうると考えているのであるが、彼らは日々の生活において、具体的には彼らの共通経験である「日常＝仕事」の渦中において、最高学府の卒業証書や所属企業の「ブランド力」さえも、自己を慰藉するのに足りないほどの、深刻な孤独や寂寥を迎えたのであり、それが彼らをして職をなげうたしめたのだと考えられる。

このような視座に立ったとき、彼らを襲った精神的枯渇の原基としては、就職して後の思いがけない「挫折」と、その結果味わう寂寥とが想起されてくる。しかし、「五月病」という言葉が示唆するように、現実には直面し、己の甘さや浅薄さを思い知らされ、強いショックを受けるといふこと

は、一部の人間に特有なものではありえない。ただ、多くは「現実とはそういうものだ」と開き直って「再起」をなしうるのに対し、件の教団に立ち至った人々は、そういう「人並み」な道筋をたどることはしなかった。その意味で、彼らに「信」を断ぜしめたゆえんを問ううえでは、果たしてどのような挫折をしたときに、人は「現実」を受け入れられなくなるほどの、虚しさや寂寥感にみまわれるのか、特に現代の若き魂を取り巻く事情にまで遡及して、問い直していく必要があると考えられる。

そもそも我々が、孤独におそわれ寂寥感に苛まれるのは、原理的には、我々が相対的なものを絶対視して、それに期待と信頼を寄せ過ぎたあげく、その期待が実を結ばぬときである。

我々は普通、日々の生活の中で、たとえば「仲良くしたい人」「実現したい仕事」などを抽象的な可能性の中だけで肥大させ、その成就を勝手に願い、実を結んだ場合にのみ「幸福」を感じているのであるが、そういうあてこみは、所詮「生身」の人間を相手にしたものであり、加えて、自他をとりまく状況自体、刻々と変わるものである。よって、期待どおりに事が運ばぬ場合が多いのは、論理的にも確実なのだが、往々にして「取らぬタヌキの皮算用」をなし、過剰なまでに妄想を膨らませてしまうのが人間の^{さが}性である⁽³⁾。

ゆえに、冷静に考えれば明らかに実現不能な場合であれ、願いが空しく取り残されると、非常な喪失感と孤独感を味わわざるをえなくなるのである。あてこみの度合いが強ければ強いほど、挫折のショックが大きいのはいうまでもない。

このように分析してみると、件のカルト教団に奔った人々に、各々の職場を放擲せしめた体験とは、彼らが「就職したら得られる」と思っていた何か、その「何か」に対するあてこみが外れたことで味わった孤独と寂寥が、ことさらに甚大であったからだと解してよいように思われる。

こうした把握をなすことで、まず脳裏に浮かぶのは、仕事に対する無意味感と、組織の末端にまで矮小化されたという実感が、企業社会を包摂する現体制の内部において、主体的に働いていくことへの疑問を育んだのであろうという忖度である。

既に十分指摘されていることだが、爛熟した資本主義下にある日本の場合、仕事は極端に細分化されているために、労働すなわち、みずからを巨大な機構の「一部品」として適合させゆく意味合いが強い。それは自我に即していうならば、多少なりともプライドを持って肥大したそれが、細分化した部門のさらに末端の一枝にまで、一気に矮小化させられるということを意味するものである。

それでも仕事の「意味」が求めやすいのなら問題はない。やりがいのある仕事に邁進し、「他人の役に立つ」自分として、矜持の基を確保しうるからである。しかし、与えられた仕事は往々にして、細分化した部門の末端の、さらに末端に位置するだけに、直接的には「意味」が見いだしにくいのが現実であることは、論を俟たない事柄である。

しかも、そうした事情を前にして、とりたててなすすべがない点も、看過しえない問題である。そもそも、そのように細分化した仕事を究極において統括・管理するものは、周知のとおり、個人

からは遠い存在たる巨大システムにほかならない。それだけに現状を改善すべく動き出そうにも、独力では太刀打ちのしようがない。そんな場所では「何かしなければならない」という思いより、「何をやっても無駄ではないか」という諦めの方が勝つことは必然である。

かくして人は、根気の要る地味な営為の過程にて、「意義」の見えない仕事であるほどに、やるせなさに嘆き、無為な毎日を送る己への発問を掘り下げゆくことになる。ここに、空虚な日常を意味付け、「歯車」にまで矮小化した自分を底上げしてくれる「幻想」への希求が募ることとなる。「宗教への飢え」をめぐり、かかる連関を見出すことは、そう難しいことではない。

しかし、こういう閉塞感や無意味感は、先に見た「五月病」の例と同様に、広く共有されるものであり、むしろどんな「新人」も、ある程度は予想していたはずの「危機」でもある。というのも最近ではやや下火となったものの、多くの学生はその学生生活の終わりに際し、いわゆる「卒業旅行」を開催し、「これが最後」と羽目はずすのが常であるが、それは彼らが、「十分に遊べるのは今だけ」であり、これからは自由のきかぬ「厳しい世界」に参入するという、「あきらめ」にも似た気持ちを持っていることを如実に照射するものだからである。

その意味で、「大組織の中の間人疎外」あるいは「世界に対する意味喪失」というような、定型図式にあてはめて件の問題を解することは、限界を持つといえる。多くの若者は、そういう事態に直面するであろうことを、メディアからの聞きかじりではあれ、多少なりとも承知しているからである。

ここに至って、発想を転換することが求められる。なぜ我々の多くは、かくも不如意と抑圧の予想される体制に、批判改革の声をあげることもなく、むしろ「現実とはそういうものだ」と「肯定」しながら参入していくのであろうか。

それは後に詳しく述べてゆくように、先程ふれたような社会の細分化と固定化が、批判改革の声をあげる気力を萎えさせるほどの閉塞状況をもたらししている一方、自己と自己をとりまく社会とを批判的に捉えうる、歴史形成的な世界観を見出すことが、現在、非常に困難になっているという状況に、原理的には負うものといえる。

しかし、そうした閉塞状況のゆえに、人々が現体制を「肯定」していると見ることは、いうまでもなく皮相である。あからさまな抑圧のみが予想される場に、誰が積極的に参与しようとするであろうか。また苦痛を一方的に強制されて、不満や怒りをもらさぬ者があるであろうか。

我々が、不如意や憤りさえ抱えながらも、現体制の積極的運転者たらんとするのは、いかなる苦痛や抑圧があれ、現体制内で生き抜く限り、いわば「豊かさ」は保障されるというあてこみがあり、その期待の代償として、様々な抑圧を受け入れていくという構造が成り立っているからである。

こうした構造を読み解くとき、就職後の挫折と失意の原基とは、仕事に対する無意味感というよりも、そうした無意味感を耐えるなら得られるであろうと、ひそかにあてこんでいた「豊かさ」が得られなかったという事態にこそ、存在すると予想しうる。然らば、件のカルト教団に奔った年代

の人間にとり、「豊かさ」とは何なのであろうか。これこそが問われるべき最たるものである。そこで次節では、思考をさらに掘り下げて、現代における「豊かさ」のイメージと、それに伴う問題群の諸相に焦点をあてることとする。

宗教を欲する心情 「^{くびき}鞭」としての「豊かさ」像をめぐって

「豊かさ」とは、いうまでもなく主観的なものである。ゆえに第一に留意すべきは、「豊かさ実現への期待」などといった場合、それはある一定の基準に基づく一律様な何ものかへの、単純な付与願望では断じてないということである。

そもそも「豊かさ」とか「幸せ」とかいうものは、本来、基準を立てられないものであるだけに、決定済みの一律的な内実を、皆が一様に欲しているなどということは原理的にありえない。大体、「何をもって最低限とするか」が決められないのは、既述のように、各人各様、抽象的な可能性の中で、「こうありたい」「これが欲しい」と肥大させた欲望を、自分流に実現することだけを求めており、仮にそれが何らかの形で満たされたとしても、欲望には際限がないだけに、いつになっても「満足」できはしないのが、人間の動かしがたい現実であるからである⁽⁴⁾。

よって多くの若者が、現体制内に生きることにより、様々な抑圧を被りながらもそれに耐えてゆけるのは、そこに順応していく限り、みずからの「苦痛の代償」として、いわゆる「シビル・ミニマム」が保障されると考えているからというよりも、あくまでこの自分が思い描いているところの欲望こそが実現できるであろうというあてこみがあるからなのだと言い換えられるべきである。

そこで「幸せ」とか「豊かさ」の内実を忖度する上では、個々人の主観、「幸せ」に対するイマジネーションの内実こそが「鍵」となることが理解されるが、この点を考える上で着目したいのは、件のカルト教団に奔った青年たち、特に犯罪に手を染めるほどに教団と内的なつながりの深かった幹部連たちは、その学歴が象徴するように、いずれも「学校エリート」であったということである。

これも再三指摘されてきたことではあるが、そもそも究極において、偏差値という「数字」以外の価値観から遮断された「学校」という均質空間で、受験という「期限」に間に合うよう「効率」を最重視して駆け足で生きてくると、たとえば生き方への問や世界観の欲求という「質的」な問題に対峙しようとすることは、「推薦入試」にすら役に立たない「非効率」で「余計」な営みと位置づけられるようになる。ここに思想性のみならず、自分なりの生き方や幸せのあり方を考えていく想像力それ自体、素直な「学校エリート」であるほどにむしろ希薄になっていくことは必然である。

その結果、どういうことがおこるかと言えば、まず自他を主体的に意味づける世界観が空白となる。さらに、そうした空白ゆえに、他律的とも称すべきイメージが、彼ら「学校エリート」の内面に、やすやすと充填されることになる。問題の「豊かさ」像に関していえば、コマーシャルズムにのり次から次へとファッショナブルに演出された、メディア経由の華やかなイメージを手に入れる

こと、たとえていえば、当時もてはやされていた、いわゆる「トレンディドラマ」が現出する華やかな消費文化を享受すること、それこそが「幸せ」であると信じて疑わなくなるということである⁽⁵⁾。

しかも、先に見たような理由により、「自分なりの幸せ」とか「人生の意義」というものを考えていく思考力や想像力は、非常に弱められている。それだけに、コマーシャルイズムに煽られた幸福イメージを突き放して見ることは困難であり、むしろ、そうした「幸福」にあずかれない者は、「不幸」で「貧しい」という思い込みが、「学校エリート」なればこそ、内心に強くはたらくことになるのである。

しかしながら、これこそ重要と思われるが、皆が夢見たこの種の華やかな消費文化は、誰にでも開かれたものではない。端的に言って「トレンディドラマ」のヒーローをなぞるには、それに見合ったヒロインが存在しなくてはならないし、その逆もまた真なりである。しかしそうした「生身」の存在は、学校社会を支配してきた「解法と解答」同様に、マニュアルによれば即座に与えられるものではない。あるいは支給される「賃金」のように、企業社会でこらむる「苦痛の代償」として、誰にでも「配分」されるものではない。その点で、いわば「あぶれて」しまったものは、ドラマやコマーシャルに煽られた「幸せ」を十全なかたちで享受することはできない。巷の消費文化に与ることはかなわない。ここに「学校エリート」の内面に醸された、「豊かさ」をめぐるひそかなあてこみは、人によっては無残にも外れることとなるのである。

私は件のカルト教団の幹部連に象徴される青年たち、すなわち「学校エリート」の過去を持つ青年たちの精神的位相を考える上で、彼らの本来的な無思想性、ならびにコマーシャルイズムに煽られるだけ煽られたその欲望のかたち、そして現代消費社会におけるこの「シビア」な構造をあわせて視野に入れなければ、件のカルト教団に立ち至った人々の内面を含め、リアルな読みは難しいと考えている。というのも上に見たごとき、ファッショナブルに演出されたメディア経由の「幸福」に与れなかった者、あるいはそうした風潮にポジティブに乗っていくには重すぎる何かを抱え込んでしまった者、彼らはいずれも二重の「呻き」を宿命づけられているとって過言でないからである。

まず彼らは現代人の「宿命」として、巨大化した組織のなか「歯車」にまで矮小化されたことからくる「取るに足らない己」に対する空虚さに直面する。さらに加えて、そうした空虚さと苦痛に耐えゆけば、おそらくは得られると思っていた、消費文化の享受に基づく「幸福」というものが、実は自分の前には門を閉ざしているという冷徹な現実を示されたことによる深刻な孤独感を味わうことになる。

しかも現代とは情報過多の時代である。このことの意味は、ことさらに強調されねばならないと思われる。満たされない彼らにも、メディアを通じて華やかな「幸福」のイメージと、それを享受する同世代の人間の「嬌声」は、居ながらにして、容赦なく及ぶのである。その結果、彼らの内面にもたらされるのは、単なる孤独感ではない。コマーシャルイズムに過剰に煽られ肥大せる欲望と、それを満たすことのできない等身大の己との相剋に、「自分だけが取り残されている」という嫉妬に彩

られた疎外感ならびに焦燥感が加わることになるのである。これが第一の「呻き」である⁽⁶⁾。

もう一つの「呻き」としては、先に少々触れたように、思想性の枯渇化という問題があげられる。すなわち、そのように大勢から「疎外」されたという、この厳肅な事実を梃子として、若き魂に人生を問わしめ、さらに世界の意味を新たに捉え返すことを可能とする、いわば希望に満ちた世界観が、今や、求めようにも極めて見だしにくくなっている⁽⁷⁾。

本来、そうした世界観なり人生観なりがあるからこそ、人は挫折した場合にも「敗者復活」の可能性をはらんだ将来への展望を描けるし、またリスクの伴う決断をなしうるのであるが、「敗者復活」の希望を抱けないところでは、「挫折」は即、人生における「全面的敗残」と受け取られざるをえない。かくして「消費社会」における「敗残者」としての「劣等感」に裏打ちされた空虚さのうちに捨て置かれたものは、虚無的なまでの閉塞感の只中に、なすすべもなく立ち尽くす以外にないといわねばならないのである。

こうした相乗的閉塞状況の最中において、己に対する空虚さと、そのような自己を意味づける思想性の枯渇化という二重の危機に落とし込まれた自我こそは、「最高学府の卒業証書」や企業の「ブランド力」さえも、自己を慰撫するには無力なほどの、深刻な孤独や寂寥に直面せられたものというべきである。

彼らに残された選択は二つである。自分をどうにもしてくれない社会に向け、ひたすら怨嗟の思いを募らせるか、逆に、どうしようもない己として問い、ひたすら「私」の世界に鬱屈していくか、そのどちらかである。

しかし、持て余した鬱積を「外界」に暴発させるということは、社会的破滅を意味するだけに、ストレスとフラストレーションとコンプレックスを蓄積させたプライド高き者たちは、大方、「私」の世界への沈潜に向かう。

彼らは、自分が「個性的」で「特別」であるための証しを「自作自演」することで、ある種の「特権意識」を獲得し、大勢からの疎外感を、逆に、大勢への「優越感」にまで転生しようとする。今や自分を特別ならしめんがための「舞台装置」は、たとえば「文学賞」狙いの「作家志望」から「社会運動」へのコミット、果ては「自分探しの世界放浪」まで、実に多種多様である。

しかし、注意しなければならないことは、こうした試みは、すべて広い意味での自己実現であるという点である。何か目標を定め、それを成就させようとする企てである以上、いくら「学校エリート」の過去を持つ若者であったとて、設定した目標に「実力」が伴わず、挫折を感じざるをえない者は当然存在する。あるいは、そのように努力して意識を高めたとしても、その自分は一体何のために役に立つのかという世界観的発問は、依然として残るのである。否、空虚とは、それがもしほんとうのものならば、何をしても晴らしようがない性質のものなのである。

彼らは疎外された者に残された可能性からも疎外された者と称しうるが、そうした内面を抱え込んでしまった者が選ぶのが、超越の価値世界にほかならない。実に「宗教を欲する心情」はここに

生起するのである。

神秘体験や宗教の選択は、それが「此方」を超えた世界への希望に生きるものであるだけに、「此方」における「ランク」や「役割」を問うものではない。いみじくも、件のカルト教団を創設した「尊師」なる人物は、「まず体験して見よ」と強調していたが、それはただ信ぜんとする意志のみを求めた点で「万人に開かれた」ものであり、現体制内では弾き出され「無価値」にされた人間を、無条件に包摂しうる広がりを一応は備えたものだった。

実際、かのカルト教団に入った人々が、ことさらに己が「神秘体験」を強調した事実は、彼らにとっての「神秘体験」というものが、「取るに足らぬ自分」にまで矮小化した自己をせりあげ、他者との差異化を保障する、特権意識の基として受容されていたことを如実に照射するものである。

しかもその自覚は、特権意識を保障する指標としてのみならず、彼らに自己と世界の意味を説き、現状を変革する主体意識をもたらすものとして、その現実否定の強い希求に一つの方向性を与えるものであった点に注意する必要がある。

既に見たように、我々が現体制内に生きることで様々な抑圧を被ることをあらかじめよく知っており、また実際、如実に苦痛を感じながらも、それに耐えていけるのは、我々があきらめたからでも柔和になったからでもなく、いかなる苦痛があれ、現体制内で生き抜く限り、「豊かさ」は保障されるというあてこみがあり、その期待の代償として、様々な抑圧を受け容れていくという構造が成り立っていたからである。

そうである以上、そのあてこみが外れた場合には、現体制はもはや自己にメリットをもたらすものではなく、苦痛の体系でしかなくなるために、到底受け容れられるものとはなりえない。ここに現実には、己を保障してくれるものとしての「肯定」の対象から、己をはじき出す憎むべきものとして、明確に否定と変革の対象と化すのは必然である。

こうした現実変革への希求に対し、件のカルト教団は、自作自演の愚行とはいえ、「ハルマゲドンの戦い」到来を説き、迫りくる危機を前に何をなすべきか、荒唐無稽な形ではあれ、ひとまず提示した。そうした「教義」が、構造的および思想的に閉塞せる状況の中、疎外された「私」の意味を積極的に問い直さしめ、再び、現実と対峙せしめるだけの新しいヴィジョンを示すものとして受容されたことは、かの信者たち、ことに「学校エリート」の過去を持つ一連の幹部たちが、「尊師」から授かった「ホーリーネーム」を誇らしげに掲げ、「救済史」に参加する「一戦士」としての「選び」の証しを見ていた事実が如実に証拠だてるものである。

このように把握してみると、件のカルト教団が受け容れられたのは、決して故ないことではないことが理解されてくる。それは巨大な機構のなかで矮小化されることから生ずる虚しさと、そのような現状を批判的に捉え返すだけの世界観の欠如、すなわち思想性の枯渇化という二重の窮状に落とし込まれた自我に向け、「歴史軸」を含んだ「世界観」と、「理想」の実現過程に参加しつつある者としての主体意識、いわば「生きがい」の二つを与ええたからだということができる。実に、か

のカルト教団は、現代の「呻き」に対し、擬似的にはあれ、一つの「答え」を授けていたのであり、ゆえにこそ若き魂を如実に捉ええたのである。事件発生から10年を迎える今、この精神的現実には、あらためて意識されなければならない。

おわりに 課題としての「超越性」

かつてメディアをにぎわせた件のカルト教団も、今や、ほぼ鳴りを潜めるに至り、またそれに伴って、彼らが論議の遡上に載ることも、関係者の裁判以外、ほとんどなくなった。「10年後の総括」を目指した本稿の試みは、この点、むしろ希代な部類に入るだろう。

しかし問題のカルト教団は、なるほど我々の視界から、「消失」こそしたものの、幾多の若き魂を呻かせた、日本社会の二重の閉塞状況は、10年後の今もなお、依然、そのままに捨て置かれていることを看過してはならない。この点を強調するのは、それが同時に、内なる呻きに彩られた「宗教への飢え」という心情も、依然、そのままに捨て置かれていることを意味するものであるからである。果たしてこの現実には、今、宗教を論ずる者、あるいは現に宗教に携わる者に向け、いかなる課題を投げかけるであろうか。ここで冒頭に述べた問題意識、すなわち現代における宗教が、まさに「現代における宗教」であるゆえに課せられた自身の課題について問い直し、「10年後の総括」を試みた、本稿を閉じることとしたい。

この点、現在、展開されている数多の「宗教論」を概観してみると、そこに一つの共通性を指摘することが可能である。たとえば、「一神教」と「多神教」の「功罪」をめぐる論争や、現代における歴史宗教の「限界」を指摘する論考等が示唆するように、問題の山積する現状とかわらせて諸宗教を検討することで、現代におけるその「効用」の度合いをはかろうとする視点の存在である。かつて否定的に言及された我が国のアニミズム的宗教が、自然との「共生」および他宗教との「共存」を可能とする「効用」を持つものとして、一転、論壇に地歩を占めつつある状況は、そうした視点を反映する典型的事例と称しうる⁽⁸⁾。

それら一連の論考に有益な成果が含まれていることは、無論のこと否定しうるものではない。しかし、宗教のこうした語られ方は、次のごとき重要な論点を看過しているように思われる。

まず第一に指摘しうるのは、宗教と人間との間に、必然的に生起する関係性の問題である。一般に宗教というものは、超越の価値世界を我々に開示するものと見なされているが、しかしそのことは、拱手傍観の態で「自ずから然る」現実ではない。「主体性が真理である」との古典的な指摘が示唆するように、宗教が「宗教」として意味を発揮しうるのは、いわば「受け手」にあたる人間が、その宗教と主体的なかかわりを持つ場合、その関係性においてのみである⁽⁹⁾。

このことと関連し、さらに強調したいのは、その関係性がはらむことになる、次のような一面である。なるほど宗教が指し示すのは、超越の価値世界ではある。しかし、その「超越」にかかわる

うとする人間は、様々な限界を刻印された、まさに「超越」の対極なる有限存在にほかならない。であるならば、「彼方」においては「超越」なるものも、それが人間を通して認識・信奉されていく限り、「此方」的なるものを不可避的に包み込まざるをえず、その点ではすでに、超越的でも絶対的でもありえない⁽¹⁰⁾。

このことは宗教というものが、ともすれば人間的、「此方」的世界に取り込まれていく可能性、すなわち「宗教」以外のものへと頹落していく可能性を、不可避的に負い込んでいることを示している。「此方」において、この「宿命」をまぬかれる宗教は存在しないといわねばならない。

しかしながら、現在主流の「宗教論」は、つまるところ「どの宗教が役に立つか」という課題意識に収斂されゆくものであるだけに、論者一同、意中の世界を「発見」しえたその点で、議論を終わりとしがちである。関心は「効用」一点に集中し、右に示した指摘など、おそらくは視野に入っていないからである。とはいえ、いかに「優れた」「効用」を持つ宗教が仮に見出されたとしても、それすら件の「宿命」からは、原理的に自由ではありえない。この厳粛な事実への目配りは、宗教を論ずる者が、いつの世も銘記すべき自覚とというが、それはかのカルト教団の頹落が露呈した、この現代という時代において、特に求められる意識であると思われる。

というのも既述のように、現代という時代とは、「宗教を欲する心情」が、ことさらに醸されやすい時代である。事実、細分化した社会の只中に、なすすべもなく投げ込まれた自我の危機を忖度すれば、何らかの超越的理念によって己を意義づけ、アイデンティティーを観念的な世界に預けてしまおうとする動機の生成は、本稿の分析からもうかがえるごとく、十分、理解されうる欲求である。

しかし、現代において宗教が「宗教」たりうべきための課題を思うとき、このような「自分本位」の「動機」に基づく、宗教への接近は、重大な問題を胚胎するものであることを指摘せざるをえない。というのも、件のカルト教団に奔っていった若き魂が示唆するごとく、宗教という本来超越的なるべきものが、現代人の切なる「呻き」の只中で、他者との差異を保障する特権意識の基として、「自分本位」に受容されるとき、「超越」とのかかわりで「主導権」を握るのは、結局のところ、自分ということになってくるからである。然らば、その宗教が開示する「超越」に自分が規定されるより、いつしか自分が「超越」を規定しがちとなってゆくのは必然といわなければならない。結果、超越的なるものは、人間的・世俗的なものに包摂され尽くし、もはや人間を制約すべき「超越」たりえなくなる。己の欲望に根底的に立脚し、いやになったらいつでも解消することのできる、いわば「自分次第の宗教」が、ここに生まれることになるのである。

宗教のこうした頹落過程は、構造的および思想的に閉塞した現代に特有な、まさに「宗教への飢え」の然らしむるところにほかならない。それだけに、現代において宗教を考えようとするものは、先に示した宗教の普遍的「宿命」に加え、この「飢え」に併呑されかねない危機にさらされつつあるものとして、宗教を把握しなおす必要があるのである。

かくも相乗的な「宗教の危機」を前にして、それでも宗教が「宗教」たりうるには、何が課題として求められるであろうか。ここで核心のみを結論的に述べる事が許されるならば、以下の二点を特に強調しておきたい。一つはすべての宗教が、その内部において、絶えざる自己批判を可能とする論理としての「神学」を必要とするということである。もう一つは、いかなる宗教もその内に、みずからの絶対化や「此方」への権力志向を厳格に戒めて、それに断固として抵抗していく「預言者的実存」を持たなければならないということである⁽¹⁾。

多くの若き魂を捉ええた件のカルト教団は、そのいずれをも欠いていたといわなければならない。その欠落がもたらせる頹廢の顛末を、我々は10年前、すでに明確に示された。現代における宗教が、かかる頹落に陥ることなく、その固有の存在意義を、ニヒリズムに抗して発揮しうるかどうかが、それは宗教が、内に蔵するその「超越性」を、いかに堅持していくかにかかっている。

注

(1) 本稿全体を貫く課題意識において、千葉眞『21世紀と福音信仰』（教文館、2001年）からは大きな示唆を受けた。また、件のカルト教団をめぐる問題群に関しては、信者たちと同世代に属す、アカデミズムとは無縁な、比較的若いライターがものした論考に、教えられる場合が多かった。やや直観的・印象批評的な側面をまめかれないものの、それを書かずにはいられない内的な必然性がにじみ出ているからである。たとえば浅羽通明『思想家志願』（幻冬舎、1995年、特に第一章）を参照。同書からも少なからぬ示唆を与えられた。

(2) 前掲『思想家志願』、15～17頁

(3) 現代人が直面せざるを得ない諸々の孤独や寂寥感は、原理的に何によるものかを実存的な観点から平易に説いた書として小原信『孤独と連帯』（中公新書、1972年、特に17～18頁）を参照。

(4) こうした「断定」に対しては異論もあるかもしれないが、この種の問題をめぐる議論では、ことが人間の本质にかかわる、まさに哲学・思想上の大問題であるだけに、互いが互いの主張の根拠を明示しても、すぐさま反証が提出され、議論が成り立たないという現実がある。ゆえに本注では該当箇所を補強する文献等をことさらに記載することはしない。

ただ「断定」という言葉に関連していえば、本稿ではむしろ、随所に「推測」の文言が入っていることを問題視する向きがあるかもしれない。無論、より持説を根拠付ける諸資料の渉猟と、それに基づく考察の発展をめざすべきであることは論をまたないが、ただこの問題に関して一言付言しておく、本稿で肉迫しようと試みたのは、「宗教を欲する心情」が兆す、その「生成の現場」である。それは語られることなく、むしろ秘められるものである。むしろ、その当事者にしてみれば、百万言を費やしたとして、語るに語れない部分である。ゆえに、その領域にふみこもうとするならば、顕わになった部分から隠された領域を忖度するしか術はなく、また、語られた言葉を読み込むことで、その言外の意味を汲み取る以外に道はないのである。それが成功しているか否かは、読み手の判断に委ねるが、いずれにする「推測」の文言が多くなるのは、本稿の対象とする領域の特殊性といわなければならない。なお、筆者がこれまで行ってきた研究は、「思想史」のカテゴリーに含まれるとはいえ、書かれた言葉の背後にある思想家の実存、いわば思想を「思想」たらしめている精神にまで遡及した分析を重んじてきた点に特色がある。こうした「精神史」の手法に関しては拙著『三谷隆正の研究 信仰・国家・歴史』（刀水書房、2001年）の序章「問題の所在」を参照のこと。

(5) 無目的な「合理性」に腐蝕された精神の空洞が、非合理的な「思想性」を欲せざるをえなくなる、その内的連関と、後者が前者に充填された場合の危険性とを、1980年代前半の技術エリート（無論、本節で指摘した「学校エリート」と重なりあう）におけるその視座の陥穽を指摘しつつ問い質した予言的な論考として、竹内啓『無邪気で危険なエリートたち』（岩波書店、1984年）、特に、同書所収の表題作を

参照。この作品も、本稿が大きな示唆を受けた書の一つである。「エリート」という言葉について付言すれば、本稿で使用した「学校エリート」なる言葉は、機械技術文明や物質主義を超えいでる、価値や理念に眼を向けることを知らず、社会的な価値判断能力を欠落させた精神の持ち主を指すものとして読み替えることもできる。

なお、ここで指摘した現象は、さらに重大な問題を胚胎するものである。すなわち現代においては自分の欲望だと思いついて入っているそれが、実は企業の都合のいいように、コモダイズムによって「欲望させられた欲望」であることが往々にして存在する。そのような強制の事実気づかずに、強いられる欲望に甘んじるとするならば、それは本来、様々な「可能性」の原基たるべき欲望にとっても「不幸」なことであろうが、しかし、より根本的な危機としては、もしこのまま、コモダイズムによって誘導せられた欲望を満たすために、現体制内における様々な抑圧や不如意に耐え、「商品」としてディスプレイされた享楽を消費することで満足を得るという状態に違和感を抱かないで行くとすれば、それは欲望の解放の「保障」という建前において、より抑圧を強化され、管理が徹底化されても、それとして実感されない事態を招くことになる。それどころか、現にある私生活の「保障」のために、その私生活を脅かしかねない存在は「異物」として排除してもらおうべく、むしろ「力=国家」の強化をこそこいねがうという倒錯した心情が醸されてくるであろう。

かくも無自覚かつ柔順な、扱いやすい均質人間が増殖した暁には、いかなる政治体制が帰結されるかは自明である。この問題に関しては、先年亡くなった藤田省三の、特に70年代半ば以降、晩年に至るまでの一連の作品（特に『精神史的考察』、『全体主義の時代経験』[『藤田省三著作集』第五巻、第六巻、みすず書房、ともに1997年]）が示唆に富むが、最近の論考では、特に今世紀に入ってより激変した内外の情勢をふまえた斉藤貴男『安心のファシズム』（岩波新書、2004年）を参照のこと。

- (6) 同時代に喧伝された「幸福」からの隔絶に直面し、苦悶しつつ彷徨った若き魂の系譜を求めれば、それは大正後期、教え込まれた「赤子」像の虚実を告発し、かの安田善次郎を暗殺した朝日平吾や、昭和のはじめ、時の蔵相・井上準之助らを襲った血盟団事件に連座した農村青年たちの「呻き」へと、その續をつなぐことをうる。この点、本稿は、昨今の「宗教論」を内在的な場から問い質すことを目的に草されたものだけに、本文中に組み込むことはなかったが、件のカルト教団をとりまく実存のありようは、原理的に、明治末期以降のいわゆる「自我の問題状況（橋川文三『昭和維新試論』、朝日新聞社、1984年）」に遡及しうる問題であることを強調しておきたい。
- (7) この点、件のカルト教団に奔った人々より上の世代においては、現実変革の希求を一手に引き受け、人間と社会の新しいヴィジョンを提示しうるものとしてはマルクス主義が有効性を保っていたといえる。現在、マルクス主義がその座を追われて久しいことは周知のとおりであるが、その「欠」を何が埋めうるか、埋めるべきなのか、この点は、重大かつ深刻な、現代日本の思想的課題といわなければならない。
- (8) 現在、書籍、雑誌ともに、現代の諸問題を射程に入れた「宗教論」は枚挙にいとまがないが、その代表的かつ典型的な議論を示すものとして、山折哲雄の論集『さまよえる日本宗教』（中央公論社、2004年）を参照。

なお、議論の前提として、そもそも「現代において宗教なるものが必要なのか」という問いが投げかけられると思われるが、この問題に対し、筆者の見解を示しておきたい。

およそ現代を「危機の時代」として把握する全ての人にとり、ニヒリズムに抗しうる超越的批判原理をどう復権させるかという問題は、喫緊の思想的課題として共有されるはずである。その場合、いかなる理念の現代的再生を目指すかは、議論の分かれるところであるが、思想的立場のいかに問わず共有すべき枠組みは、すなわち、理念の復権は宗教の復権と相即不離の関係にあるという観点にほかならない。

たとえば「人間愛」という理念一つをとってみても、それを究極的に担保するものは、被造物としての人間観、およびイエスの贖罪死という宗教的事実であることは言うまでもない。然らば件の理念を産みかつ支える礎石としての宗教と切り離し、理念それのみを単独で復権させようとするのは、抽象的かつ不毛な試みだと言わなければならない。

現代日本の知の状況下、現実を規矩しうる価値や理念に関しては、多くの人がそれを宗教とは無縁に構想しうるし、またそうすべきであると考えている。しかしこれは大きな思い違いである。虚無に腐蝕された現代という時代の只中に、理念の復権を試みるためには、件の理念を産みかつ支えるところの形而上的確信、究極的には宗教という超越の世界観が必然的に要請される。その意味で、「現代において宗教なるものが必要なのか」という発問は、それが単なる無知でなければ、ニヒリズムの肯定と紙一重である。

- (9) 当該部の表現には、微妙な問題が含まれていることはいうまでもない。というのも、「超越」なるものに「我々がかかわる」という言い方は、信仰の現実を言い表したものとしては厳密ではなく、より適切には、「超越」なるものが人間に対向するがゆえに、我々は、かかる存在と向き合おうと言うべきであるからである。本稿ではその趣旨にしたがって、件の箇所を「一般的」な表現にとどめたが、別の観点からする起稿であれば、当然、より込み入った書き方となったであろうことを付言しておく。
- (10) この「限界意識」について、鈴木範久『「代表的日本人」を読む』（大明堂、1988年、特に終章175～176頁）から大きな示唆を受けた。
- (11) 「神学的実存」と「預言者的実存」の重要性に関しては、前掲・千葉真「宗教と政治」（『二十一世紀と福音信仰』、教文館、2001年、168～169頁）を参照。この言葉も同書の表現に基づくものである。

参考文献

- 小原信『孤独と連帯』（中公新書、1972年）
竹内啓『無邪気で危険なエリートたち』（岩波書店、1984年）
橋川文三『昭和維新試論』（朝日新聞社、1984年）
藤田省三『精神史的考察』（『藤田省三著作集』第五巻、みすず書房、1997年）
同『全体主義の時代経験』（『藤田省三著作集』第六巻、みすず書房、1997年）
鈴木範久『「代表的日本人」を読む』（大明堂、1988年）
千葉真『二十一世紀と福音信仰』（教文館、2001年）
村松晋『三谷隆正の研究 信仰・国家・歴史』（2001年、刀水書房）
斉藤貴男『安心のファシズム』（岩波新書、2004年）
山折哲雄『さまよえる日本宗教』（中央公論社、2004年）

現代日本の精神的位相と宗教の課題

「起越性」をめぐる一考察

村 松 晋

A study of the Spiritual Phase in Modern Japan and its Religious Problem:
Focused on Transcendancy

Susumu MURAMATSU

The purpose of this paper is the solution of the religious problem in modern Japan. The conclusion of this study is that the most important task of religion in modern society is to have theology and a prophetic existence to keep transcendancy.

問題の所在

今から10年前、「戦後50年」が焦点となった1995年という年は、思えば宗教が議論された一年でもあった。いうまでもなく、あるカルト教団が引き起こした史上稀なる惨劇に、端を発する現象である。この教団が含意する問題群と対峙することは、文字通り「現代と宗教」を考える上で不可欠な試みであるだけに、これまで多彩な議論が展開されてきたことは記憶に新しい。爾来、10年を閲するなかで、蓄積された論考を顧みてみると、語り手の多さとは裏腹に、かの教団が照射する問題は、いまだ「問題」として十分に意識されていない印象を受ける。

無論、「宗教学者」をはじめとする、いわば「専門家」の手になる論考は、少なからず公にされてきた。そこで明らかにされた見解には学ぶべき点も少なくない。しかしそうした学問の、「価値中立的」かつ「客観的」なスタンスは、価値判断をいわば「棚上げ」にした分析である点で、かの教団が胚胎する問題群の思想的総括を、結果的に遅らせることになったと思われる。

求められるのは、10年前の「事件」の意味を、「精神の深み」から問い質し、現代における宗教が、まさに「現代における宗教」であるゆえに銘記すべき、自身の課題を明示することにある。本稿は、その課題を詳らかにするために起稿される。それは「宗教学」の学問的フレームを、必ずしも意識・踏襲するものではなく、加えて以下に見るように、考察の対象も網羅的ではないだけに、件の分野で展開される、一般的な論考とは趣を異にするかもしれない。しかし、上の叙述が示唆するご

Key words; religion, cult, modern Japan, transcendancy, post modern

とき、筆者の実存的・主体的立場からする関心は、逆に、一連の論考がカバーしえない領域に相渉るものとして、固有の任を果たしうると考えている⁽¹⁾。

現代日本における「呻き」の原基

本稿では考察の対象として、件のカルト教団の幹部連に焦点をあてることとする。彼らは「信」のために国禁を犯すほど、「筋金入り」である点で、その軌跡は信者たちの実存を、最も先鋭的に照射するものと考えられるからである。

幹部の多くは10年前、20代後半から30代半ばの年齢にあっていたが、彼らの内面をあとづけるべく、この世代が直面する共通な原体験を探求してみると、まず第一に、それぞれの「就業体験」が、分析の対象としてクローズアップされてくる。すなわち、仕事の日々を通じて思い知らされた、ある決定的な「出来事」が、彼らをして職をなげうたせ、「信」の道を行かしめたのではないかという推測である。

この点に関しては、実は彼ら自身が語るところでもあって、たとえば研究職を経てきた幹部の一人は、精神的発達の伴わぬ技術開発では、世界が戦場になるだけだと、職場に見切りをつけた理由を述べ、かわりに信仰者として生きることで、21世紀に向けた意義ある役割を担いたくなると話している⁽²⁾。

こうした説明は、彼に限らず、多少の異同を含んで他でも述べられている。しかし、物質的享楽に偏った現代消費文化に対する論難や、価値意識を欠落させた科学技術の自己展開への警告は、従来より指摘されてきたところであり、またそうした論者が必ずしも「宗教」へと行き着くわけではない。この点を考えれば一連の弁明が、必ずしも「真相」を語るものでないことは明白である。

そもそも信ずるとは、「信ずる」としか言いようのない一つの断行であり、その意味で、理屈を越えた飛躍である。そうである以上、やはり「尋常」な行為ではないのであって、「決断」の背後には、その人を「飛躍」させるに足るだけの、何か切実な体験があると見るべきである。

かのカルト教団に連なった者たち、ことに犯罪にまで手を染めた幹部連たちは、その多くが「高学歴」であり、また「一流企業」に勤めていた人も珍しくないことは、再三指摘されてきた。人は普通、それらの肩書が、堅固な「抛り所」たりうると考えているのであるが、彼らは日々の生活において、具体的には彼らの共通経験である「日常＝仕事」の渦中において、最高学府の卒業証書や所属企業の「ブランド力」さえも、自己を慰藉するのに足りないほどの、深刻な孤独や寂寥を迎えたのであり、それが彼らをして職をなげうたしめたのだと考えられる。

このような視座に立ったとき、彼らを襲った精神的枯渇の原基としては、就職して後の思いがけない「挫折」と、その結果味わう寂寥とが想起されてくる。しかし、「五月病」という言葉が示唆するように、現実には直面し、己の甘さや浅薄さを思い知らされ、強いショックを受けるといふこと

は、一部の人間に特有なものではありえない。ただ、多くは「現実とはそういうものだ」と開き直って「再起」をなしうるのに対し、件の教団に立ち至った人々は、そういう「人並み」な道筋をたどることはしなかった。その意味で、彼らに「信」を断ぜしめたゆえんを問ううえでは、果たしてどういふ挫折をしたときに、人は「現実」を受け入れられなくなるほどの、虚しさや寂寥感にみまわれるのか、特に現代の若き魂を取り巻く事情にまで遡及して、問い直していく必要があると考えられる。

そもそも我々が、孤独におそわれ寂寥感に苛まれるのは、原理的には、我々が相対的なものを絶対視して、それに期待と信頼を寄せ過ぎたあげく、その期待が実を結ばぬときである。

我々は普通、日々の生活の中で、たとえば「仲良くしたい人」「実現したい仕事」などを抽象的な可能性の中だけで肥大させ、その成就を勝手に願い、実を結んだ場合にのみ「幸福」を感じているのであるが、そういうあてこみは、所詮「生身」の人間を相手にしたものであり、加えて、自他をとりまく状況自体、刻々と変わるものである。よって、期待どおりに事が運ばぬ場合が多いのは、論理的にも確実なのだが、往々にして「取らぬタヌキの皮算用」をなし、過剰なまでに妄想を膨らませてしまうのが人間の^{さが}性である⁽³⁾。

ゆえに、冷静に考えれば明らかに実現不能な場合であれ、願いが空しく取り残されると、非常な喪失感と孤独感を味わわざるをえなくなるのである。あてこみの度合いが強ければ強いほど、挫折のショックが大きいのはいうまでもない。

このように分析してみると、件のカルト教団に奔った人々に、各々の職場を放擲せしめた体験とは、彼らが「就職したら得られる」と思っていた何か、その「何か」に対するあてこみが外れたことで味わった孤独と寂寥が、ことさらに甚大であったからだと解してよいように思われる。

こうした把握をなすことで、まず脳裏に浮かぶのは、仕事に対する無意味感と、組織の末端にまで矮小化されたという実感が、企業社会を包摂する現体制の内部において、主体的に働いていくことへの疑問を育んだのであろうという忖度である。

既に十分指摘されていることだが、爛熟した資本主義下にある日本の場合、仕事は極端に細分化されているために、労働すなわち、みずからを巨大な機構の「一部品」として適合させゆく意味合いが強い。それは自我に即していうならば、多少なりともプライドを持って肥大したそれが、細分化した部門のさらに末端の一枝にまで、一気に矮小化させられるということを意味するものである。

それでも仕事の「意味」が求めやすいのなら問題はない。やりがいのある仕事に邁進し、「他人の役に立つ」自分として、矜持の基を確保しうるからである。しかし、与えられた仕事は往々にして、細分化した部門の末端の、さらに末端に位置するだけに、直接的には「意味」が見いだしにくいのが現実であることは、論を俟たない事柄である。

しかも、そうした事情を前にして、とりたててなすすべがない点も、看過しえない問題である。そもそも、そのように細分化した仕事を究極において統括・管理するものは、周知のとおり、個人

からは遠い存在たる巨大システムにほかならない。それだけに現状を改善すべく動き出そうにも、独力では太刀打ちのしようがない。そんな場所では「何かしなければならない」という思いより、「何をやっても無駄ではないか」という諦めの方が勝つことは必然である。

かくして人は、根気の要る地味な営為の過程にて、「意義」の見えない仕事であるほどに、やるせなさに嘆き、無為な毎日を送る己への発問を掘り下げゆくことになる。ここに、空虚な日常を意味付け、「歯車」にまで矮小化した自分を底上げしてくれる「幻想」への希求が募ることとなる。「宗教への飢え」をめぐり、かかる連関を見出すことは、そう難しいことではない。

しかし、こういう閉塞感や無意味感は、先に見た「五月病」の例と同様に、広く共有されるものであり、むしろどんな「新人」も、ある程度は予想していたはずの「危機」でもある。というのも最近ではやや下火となったものの、多くの学生はその学生生活の終わりに際し、いわゆる「卒業旅行」を開催し、「これが最後」と羽目はずすのが常であるが、それは彼らが、「十分に遊べるのは今だけ」であり、これからは自由のきかぬ「厳しい世界」に参入するという、「あきらめ」にも似た気持ちを持っていることを如実に照射するものだからである。

その意味で、「大組織の中の間人疎外」あるいは「世界に対する意味喪失」というような、定型図式にあてはめて件の問題を解することは、限界を持つといえる。多くの若者は、そういう事態に直面するであろうことを、メディアからの聞きかじりではあれ、多少なりとも承知しているからである。

ここに至って、発想を転換することが求められる。なぜ我々の多くは、かくも不如意と抑圧の予想される体制に、批判改革の声をあげることもなく、むしろ「現実とはそういうものだ」と「肯定」しながら参入していくのであろうか。

それは後に詳しく述べてゆくように、先程ふれたような社会の細分化と固定化が、批判改革の声をあげる気力を萎えさせるほどの閉塞状況をもたらししている一方、自己と自己をとりまく社会とを批判的に捉えうる、歴史形成的な世界観を見出すことが、現在、非常に困難になっているという状況に、原理的には負うものといえる。

しかし、そうした閉塞状況のゆえに、人々が現体制を「肯定」しているを見ることは、いうまでもなく皮相である。あからさまな抑圧のみが予想される場に、誰が積極的に参与しようとするであろうか。また苦痛を一方的に強制されて、不満や怒りをもらさぬ者があるであろうか。

我々が、不如意や憤りさえ抱えながらも、現体制の積極的運転者たらんとするのは、いかなる苦痛や抑圧があれ、現体制内で生き抜く限り、いわば「豊かさ」は保障されるというあてこみがあり、その期待の代償として、様々な抑圧を受け入れていくという構造が成り立っているからである。

こうした構造を読み解くとき、就職後の挫折と失意の原基とは、仕事に対する無意味感というよりも、そうした無意味感を耐えるなら得られるであろうと、ひそかにあてこんでいた「豊かさ」が得られなかったという事態にこそ、存在すると予想しうる。然らば、件のカルト教団に奔った年代

の人間にとり、「豊かさ」とは何なのであろうか。これこそが問われるべき最たるものである。そこで次節では、思考をさらに掘り下げて、現代における「豊かさ」のイメージと、それに伴う問題群の諸相に焦点をあてることとする。

宗教を欲する心情 「^{くびき}鞭」としての「豊かさ」像をめぐって

「豊かさ」とは、いうまでもなく主観的なものである。ゆえに第一に留意すべきは、「豊かさ実現への期待」などといった場合、それはある一定の基準に基づく一律様な何ものかへの、単純な付与願望では断じてないということである。

そもそも「豊かさ」とか「幸せ」とかいうものは、本来、基準を立てられないものであるだけに、決定済みの一律的な内実を、皆が一様に欲しているなどということは原理的にありえない。大体、「何をもって最低限とするか」が決められないのは、既述のように、各人各様、抽象的な可能性の中で、「こうありたい」「これが欲しい」と肥大させた欲望を、自分流に実現することだけを求めており、仮にそれが何らかの形で満たされたとしても、欲望には際限がないだけに、いつになっても「満足」できはしないのが、人間の動かしがたい現実であるからである⁽⁴⁾。

よって多くの若者が、現体制内に生きることにより、様々な抑圧を被りながらもそれに耐えてゆけるのは、そこに順応していく限り、みずからの「苦痛の代償」として、いわゆる「シビル・ミニマム」が保障されると考えているからというよりも、あくまでこの自分が思い描いているところの欲望こそが実現できるであろうというあてこみがあるからなのだと言い換えられるべきである。

そこで「幸せ」とか「豊かさ」の内実を忖度する上では、個々人の主観、「幸せ」に対するイマジネーションの内実こそが「鍵」となることが理解されるが、この点を考える上で着目したいのは、件のカルト教団に奔った青年たち、特に犯罪に手を染めるほどに教団と内的なつながりの深かった幹部連たちは、その学歴が象徴するように、いずれも「学校エリート」であったということである。

これも再三指摘されてきたことではあるが、そもそも究極において、偏差値という「数字」以外の価値観から遮断された「学校」という均質空間で、受験という「期限」に間に合うよう「効率」を最重視して駆け足で生きてくると、たとえば生き方への問や世界観の欲求という「質的」な問題に対峙しようとすることは、「推薦入試」にすら役に立たない「非効率」で「余計」な営みと位置づけられるようになる。ここに思想性のみならず、自分なりの生き方や幸せのあり方を考えていく想像力それ自体、素直な「学校エリート」であるほどにむしろ希薄になっていくことは必然である。

その結果、どういうことがおこるかと言えば、まず自他を主体的に意味づける世界観が空白となる。さらに、そうした空白ゆえに、他律的とも称すべきイメージが、彼ら「学校エリート」の内面に、やすやすと充填されることになる。問題の「豊かさ」像に関していえば、コマーシャルズムにのり次から次へとファッショナブルに演出された、メディア経由の華美なイメージを手に入れる

こと、たとえていえば、当時もてはやされていた、いわゆる「トレンディドラマ」が現出する華やかな消費文化を享受すること、それこそが「幸せ」であると信じて疑わなくなるということである⁽⁵⁾。

しかも、先に見たような理由により、「自分なりの幸せ」とか「人生の意義」というものを考えていく思考力や想像力は、非常に弱められている。それだけに、コマーシャルイズムに煽られた幸福イメージを突き放して見ることは困難であり、むしろ、そうした「幸福」にあずかれない者は、「不幸」で「貧しい」という思い込みが、「学校エリート」なればこそ、内心に強くはたらくことになるのである。

しかしながら、これこそ重要と思われるが、皆が夢見たこの種の華やかな消費文化は、誰にでも開かれたものではない。端的にいうと「トレンディドラマ」のヒーローをなぞるには、それに見合ったヒロインが存在しなくてはならないし、その逆もまた真なりである。しかしそうした「生身」の存在は、学校社会を支配してきた「解法と解答」同様に、マニュアルによれば即座に与えられるものではない。あるいは支給される「賃金」のように、企業社会でこらむる「苦痛の代償」として、誰にでも「配分」されるものではない。その点で、いわば「あぶれて」しまったものは、ドラマやコマーシャルに煽られた「幸せ」を十全なかたちで享受することはできない。巷の消費文化に与ることはかなわない。ここに「学校エリート」の内面に醸された、「豊かさ」をめぐるひそかなあてこみは、人によっては無残にも外れることとなるのである。

私は件のカルト教団の幹部連に象徴される青年たち、すなわち「学校エリート」の過去を持つ青年たちの精神的位相を考える上で、彼らの本来的な無思想性、ならびにコマーシャルイズムに煽られるだけ煽られたその欲望のかたち、そして現代消費社会におけるこの「シビア」な構造をあわせて視野に入れなければ、件のカルト教団に立ち至った人々の内面を含め、リアルな読みは難しいと考えている。というのも上に見たごとき、ファッショナブルに演出されたメディア経由の「幸福」に与れなかった者、あるいはそうした風潮にポジティブに乗っていくには重すぎる何かを抱え込んでしまった者、彼らはいずれも二重の「呻き」を宿命づけられているとって過言でないからである。

まず彼らは現代人の「宿命」として、巨大化した組織のなか「歯車」にまで矮小化されたことからくる「取るに足らない己」に対する空虚さに直面する。さらに加えて、そうした空虚さと苦痛に耐えゆけば、おそらくは得られると思っていた、消費文化の享受に基づく「幸福」というものが、実は自分の前には門を閉ざしているという冷徹な現実を示されたことによる深刻な孤独感を味わうことになる。

しかも現代とは情報過多の時代である。このことの意味は、ことさらに強調されねばならないと思われる。満たされない彼らにも、メディアを通じて華やかな「幸福」のイメージと、それを享受する同世代の人間の「嬌声」は、居ながらにして、容赦なく及ぶのである。その結果、彼らの内面にもたらされるのは、単なる孤独感ではない。コマーシャルイズムに過剰に煽られ肥大せる欲望と、それを満たすことのできない等身大の己との相剋に、「自分だけが取り残されている」という嫉妬に彩

られた疎外感ならびに焦燥感が加わることになるのである。これが第一の「呻き」である⁽⁶⁾。

もう一つの「呻き」としては、先に少々触れたように、思想性の枯渇化という問題があげられる。すなわち、そのように大勢から「疎外」されたという、この厳肅な事実を梃子として、若き魂に人生を問わしめ、さらに世界の意味を新たに捉え返すことを可能とする、いわば希望に満ちた世界観が、今や、求めようにも極めて見だしにくくなっている⁽⁷⁾。

本来、そうした世界観なり人生観なりがあるからこそ、人は挫折した場合にも「敗者復活」の可能性をはらんだ将来への展望を描けるし、またリスクの伴う決断をなしうるのであるが、「敗者復活」の希望を抱けないところでは、「挫折」は即、人生における「全面的敗残」と受け取られざるをえない。かくして「消費社会」における「敗残者」としての「劣等感」に裏打ちされた空虚さのうちに捨て置かれたものは、虚無的なまでの閉塞感の只中に、なすすべもなく立ち尽くす以外にないといわねばならないのである。

こうした相乗的閉塞状況の最中において、己に対する空虚さと、そのような自己を意味づける思想性の枯渇化という二重の危機に落とし込まれた自我こそは、「最高学府の卒業証書」や企業の「ブランド力」さえも、自己を慰撫するには無力なほどの、深刻な孤独や寂寥に直面せられたものというべきである。

彼らに残された選択は二つである。自分をどうにもしてくれない社会に向け、ひたすら怨嗟の思いを募らせるか、逆に、どうしようもない己として問い、ひたすら「私」の世界に鬱屈していくか、そのどちらかである。

しかし、持て余した鬱積を「外界」に暴発させるということは、社会的破滅を意味するだけに、ストレスとフラストレーションとコンプレックスを蓄積させたプライド高き者たちは、大方、「私」の世界への沈潜に向かう。

彼らは、自分が「個性的」で「特別」であるための証しを「自作自演」することで、ある種の「特権意識」を獲得し、大勢からの疎外感を、逆に、大勢への「優越感」にまで転生しようとする。今や自分を特別ならしめんがための「舞台装置」は、たとえば「文学賞」狙いの「作家志望」から「社会運動」へのコミット、果ては「自分探しの世界放浪」まで、実に多種多様である。

しかし、注意しなければならないことは、こうした試みは、すべて広い意味での自己実現であるという点である。何か目標を定め、それを成就させようとする企てである以上、いくら「学校エリート」の過去を持つ若者であったとて、設定した目標に「実力」が伴わず、挫折を感じざるをえない者は当然存在する。あるいは、そのように努力して意識を高めたとしても、その自分は一体何のために役に立つのかという世界観的発問は、依然として残るのである。否、空虚とは、それがもしほんとうのものならば、何をしても晴らしようがない性質のものなのである。

彼らは疎外された者に残された可能性からも疎外された者と称しうるが、そうした内面を抱え込んでしまった者が選ぶのが、超越の価値世界にほかならない。実に「宗教を欲する心情」はここに

生起するのである。

神秘体験や宗教の選択は、それが「此方」を超えた世界への希望に生きるものであるだけに、「此方」における「ランク」や「役割」を問うものではない。いみじくも、件のカルト教団を創設した「尊師」なる人物は、「まず体験して見よ」と強調していたが、それはただ信ぜんとする意志のみを求めた点で「万人に開かれた」ものであり、現体制内では弾き出され「無価値」にされた人間を、無条件に包摂しうる広がりを一応は備えたものだった。

実際、かのカルト教団に入った人々が、ことさらに己が「神秘体験」を強調した事実は、彼らにとっての「神秘体験」というものが、「取るに足らぬ自分」にまで矮小化した自己をせりあげ、他者との差異化を保障する、特権意識の基として受容されていたことを如実に照射するものである。

しかもその自覚は、特権意識を保障する指標としてのみならず、彼らに自己と世界の意味を説き、現状を変革する主体意識をもたらすものとして、その現実否定の強い希求に一つの方向性を与えるものであった点に注意する必要がある。

既に見たように、我々が現体制内に生きることで様々な抑圧を被ることをあらかじめよく知っており、また実際、如実に苦痛を感じながらも、それに耐えていけるのは、我々があきらめたからでも柔和になったからでもなく、いかなる苦痛があれ、現体制内で生き抜く限り、「豊かさ」は保障されるというあてこみがあり、その期待の代償として、様々な抑圧を受け容れていくという構造が成り立っていたからである。

そうである以上、そのあてこみが外れた場合には、現体制はもはや自己にメリットをもたらすものではなく、苦痛の体系でしかなくなるために、到底受け容れられるものとはなりえない。ここに現実には、己を保障してくれるものとしての「肯定」の対象から、己をはじき出す憎むべきものとして、明確に否定と変革の対象と化すのは必然である。

こうした現実変革への希求に対し、件のカルト教団は、自作自演の愚行とはいえ、「ハルマゲドンの戦い」到来を説き、迫りくる危機を前に何をなすべきか、荒唐無稽な形ではあれ、ひとまず提示した。そうした「教義」が、構造的および思想的に閉塞せる状況の中、疎外された「私」の意味を積極的に問い直さしめ、再び、現実と対峙せしめるだけの新しいヴィジョンを示すものとして受容されたことは、かの信者たち、ことに「学校エリート」の過去を持つ一連の幹部たちが、「尊師」から授かった「ホーリーネーム」を誇らしげに掲げ、「救済史」に参加する「一戦士」としての「選び」の証しを見ていた事実が如実に証拠だてるものである。

このように把握してみると、件のカルト教団が受け容れられたのは、決して故ないことではないことが理解されてくる。それは巨大な機構のなかで矮小化されることから生ずる虚しさと、そのような現状を批判的に捉え返すだけの世界観の欠如、すなわち思想性の枯渇化という二重の窮状に落とし込まれた自我に向け、「歴史軸」を含んだ「世界観」と、「理想」の実現過程に参加しつつある者としての主体意識、いわば「生きがい」の二つを与ええたからだということができる。実に、か

のカルト教団は、現代の「呻き」に対し、擬似的にはあれ、一つの「答え」を授けていたのであり、ゆえにこそ若き魂を如実に捉ええたのである。事件発生から10年を迎える今、この精神的現実には、あらためて意識されなければならない。

おわりに 課題としての「超越性」

かつてメディアをにぎわせた件のカルト教団も、今や、ほぼ鳴りを潜めるに至り、またそれに伴って、彼らが論議の遡上に載ることも、関係者の裁判以外、ほとんどなくなった。「10年後の総括」を目指した本稿の試みは、この点、むしろ希代な部類に入るだろう。

しかし問題のカルト教団は、なるほど我々の視界から、「消失」こそしたものの、幾多の若き魂を呻かせた、日本社会の二重の閉塞状況は、10年後の今もなお、依然、そのままに捨て置かれていることを看過してはならない。この点を強調するのは、それが同時に、内なる呻きに彩られた「宗教への飢え」という心情も、依然、そのままに捨て置かれていることを意味するものであるからである。果たしてこの現実には、今、宗教を論ずる者、あるいは現に宗教に携わる者に向け、いかなる課題を投げかけるであろうか。ここで冒頭に述べた問題意識、すなわち現代における宗教が、まさに「現代における宗教」であるゆえに課せられた自身の課題について問い直し、「10年後の総括」を試みた、本稿を閉じることとしたい。

この点、現在、展開されている数多の「宗教論」を概観してみると、そこに一つの共通性を指摘することが可能である。たとえば、「一神教」と「多神教」の「功罪」をめぐる論争や、現代における歴史宗教の「限界」を指摘する論考等が示唆するように、問題の山積する現状とかわらせて諸宗教を検討することで、現代におけるその「効用」の度合いをはかろうとする視点の存在である。かつて否定的に言及された我が国のアニミズム的宗教が、自然との「共生」および他宗教との「共存」を可能とする「効用」を持つものとして、一転、論壇に地歩を占めつつある状況は、そうした視点を反映する典型的事例と称しうる⁽⁸⁾。

それら一連の論考に有益な成果が含まれていることは、無論のこと否定しうるものではない。しかし、宗教のこうした語られ方は、次のごとき重要な論点を看過しているように思われる。

まず第一に指摘しうるのは、宗教と人間との間に、必然的に生起する関係性の問題である。一般に宗教というものは、超越の価値世界を我々に開示するものと見なされているが、しかしそのことは、拱手傍観の態で「自ずから然る」現実ではない。「主体性が真理である」との古典的な指摘が示唆するように、宗教が「宗教」として意味を発揮しうるのは、いわば「受け手」にあたる人間が、その宗教と主体的なかかわりを持つ場合、その関係性においてのみである⁽⁹⁾。

このことと関連し、さらに強調したいのは、その関係性がはらむことになる、次のような一面である。なるほど宗教が指し示すのは、超越の価値世界ではある。しかし、その「超越」にかかわる

うとする人間は、様々な限界を刻印された、まさに「超越」の対極なる有限存在にほかならない。であるならば、「彼方」においては「超越」なるものも、それが人間を通して認識・信奉されていく限り、「此方」的なるものを不可避的に包み込まざるをえず、その点ではすでに、超越的でも絶対的でもありえない⁽¹⁰⁾。

このことは宗教というものが、ともすれば人間的、「此方」的世界に取り込まれていく可能性、すなわち「宗教」以外のものへと頹落していく可能性を、不可避的に負い込んでいることを示している。「此方」において、この「宿命」をまぬかれる宗教は存在しないといわねばならない。

しかしながら、現在主流の「宗教論」は、つまるところ「どの宗教が役に立つか」という課題意識に収斂されゆくものであるだけに、論者一同、意中の世界を「発見」しえたその点で、議論を終わりとしがちである。関心は「効用」一点に集中し、右に示した指摘など、おそらくは視野に入っていないからである。とはいえ、いかに「優れた」「効用」を持つ宗教が仮に見出されたとしても、それすら件の「宿命」からは、原理的に自由ではありえない。この厳粛な事実への目配りは、宗教を論ずる者が、いつの世も銘記すべき自覚といいうるが、それはかのカルト教団の頹落が露呈した、この現代という時代において、特に求められる意識であると思われる。

というのも既述のように、現代という時代とは、「宗教を欲する心情」が、ことさらに醸されやすい時代である。事実、細分化した社会の只中に、なすすべもなく投げ込まれた自我の危機を忖度すれば、何らかの超越的理念によって己を意義づけ、アイデンティティーを観念的な世界に預けてしまおうとする動機の生成は、本稿の分析からもうかがえるごとく、十分、理解されうる欲求である。

しかし、現代において宗教が「宗教」たりうべきための課題を思うとき、このような「自分本位」の「動機」に基づく、宗教への接近は、重大な問題を胚胎するものであることを指摘せざるをえない。というのも、件のカルト教団に奔っていった若き魂が示唆するごとく、宗教という本来超越的なるべきものが、現代人の切なる「呻き」の只中で、他者との差異を保障する特権意識の基として、「自分本位」に受容されるとき、「超越」とのかかわりで「主導権」を握るのは、結局のところ、自分ということになってくるからである。然らば、その宗教が開示する「超越」に自分が規定されるより、いつしか自分が「超越」を規定しがちとなってゆくのは必然といわなければならない。結果、超越的なるものは、人間的・世俗的なものに包摂され尽くし、もはや人間を制約すべき「超越」たりえなくなる。己の欲望に根底的に立脚し、いやになったらいつでも解消することのできる、いわば「自分次第の宗教」が、ここに生まれることになるのである。

宗教のこうした頹落過程は、構造的および思想的に閉塞した現代に特有な、まさに「宗教への飢え」の然らしむるところにほかならない。それだけに、現代において宗教を考えようとするものは、先に示した宗教の普遍的「宿命」に加え、この「飢え」に併呑されかねない危機にさらされつつあるものとして、宗教を把握しなおす必要があるのである。

かくも相乗的な「宗教の危機」を前にして、それでも宗教が「宗教」たりうるには、何が課題として求められるであろうか。ここで核心のみを結論的に述べる事が許されるならば、以下の二点を特に強調しておきたい。一つはすべての宗教が、その内部において、絶えざる自己批判を可能とする論理としての「神学」を必要とするということである。もう一つは、いかなる宗教もその内に、みずからの絶対化や「此方」への権力志向を厳格に戒めて、それに断固として抵抗していく「預言者的実存」を持たなければならないということである⁽¹⁾。

多くの若き魂を捉ええた件のカルト教団は、そのいずれをも欠いていたといわなければならない。その欠落がもたらせる頹廢の顛末を、我々は10年前、すでに明確に示された。現代における宗教が、かかる頹落に陥ることなく、その固有の存在意義を、ニヒリズムに抗して発揮しうるかどうかが、それは宗教が、内に蔵するその「超越性」を、いかに堅持していくかにかかっている。

注

(1) 本稿全体を貫く課題意識において、千葉眞『21世紀と福音信仰』（教文館、2001年）からは大きな示唆を受けた。また、件のカルト教団をめぐる問題群に関しては、信者たちと同世代に属す、アカデミズムとは無縁な、比較的若いライターがものした論考に、教えられる場合が多かった。やや直観的・印象批評的な側面をまめかれないものの、それを書かずにはいられない内的な必然性がにじみ出ているからである。たとえば浅羽通明『思想家志願』（幻冬舎、1995年、特に第一章）を参照。同書からも少なからぬ示唆を与えられた。

(2) 前掲『思想家志願』、15～17頁

(3) 現代人が直面せざるを得ない諸々の孤独や寂寥感は、原理的に何によるものかを実存的な観点から平易に説いた書として小原信『孤独と連帯』（中公新書、1972年、特に17～18頁）を参照。

(4) こうした「断定」に対しては異論もあるかもしれないが、この種の問題をめぐる議論では、ことが人間の本质にかかわる、まさに哲学・思想上の大問題であるだけに、互いが互いの主張の根拠を明示しても、すぐさま反証が提出され、議論が成り立たないという現実がある。ゆえに本注では該当箇所を補強する文献等をことさらに記載することはしない。

ただ「断定」という言葉に関連していえば、本稿ではむしろ、随所に「推測」の文言が入っていることを問題視する向きがあるかもしれない。無論、より持説を根拠付ける諸資料の渉猟と、それに基づく考察の発展をめざすべきであることは論をまたないが、ただこの問題に関して一言付言しておく、本稿で肉迫しようと試みたのは、「宗教を欲する心情」が兆す、その「生成の現場」である。それは語られることなく、むしろ秘められるものである。むしろ、その当事者にしてみれば、百万言を費やしたとして、語るに語れない部分である。ゆえに、その領域にふみこもうとするならば、顕わになった部分から隠された領域を忖度するしか術はなく、また、語られた言葉を読み込むことで、その言外の意味を汲み取る以外に道はないのである。それが成功しているか否かは、読み手の判断に委ねるが、いずれにする「推測」の文言が多くなるのは、本稿の対象とする領域の特殊性といわなければならない。なお、筆者がこれまで行ってきた研究は、「思想史」のカテゴリーに含まれるとはいえ、書かれた言葉の背後にある思想家の実存、いわば思想を「思想」たらしめている精神にまで遡及した分析を重んじてきた点に特色がある。こうした「精神史」の手法に関しては拙著『三谷隆正の研究 信仰・国家・歴史』（刀水書房、2001年）の序章「問題の所在」を参照のこと。

(5) 無目的な「合理性」に腐蝕された精神の空洞が、非合理的な「思想性」を欲せざるをえなくなる、その内的連関と、後者が前者に充填された場合の危険性とを、1980年代前半の技術エリート（無論、本節で指摘した「学校エリート」と重なりあう）におけるその視座の陥穽を指摘しつつ問い質した予言的な論考として、竹内啓『無邪気で危険なエリートたち』（岩波書店、1984年）、特に、同書所収の表題作を

参照。この作品も、本稿が大きな示唆を受けた書の一つである。「エリート」という言葉について付言すれば、本稿で使用した「学校エリート」なる言葉は、機械技術文明や物質主義を超えいでる、価値や理念に眼を向けることを知らず、社会的な価値判断能力を欠落させた精神の持ち主を指すものとして読み替えることもできる。

なお、ここで指摘した現象は、さらに重大な問題を胚胎するものである。すなわち現代においては自分の欲望だと思いついて入っているそれが、実は企業の都合のいいように、コマーシャリズムによって「欲望させられた欲望」であることが往々にして存在する。そのような強制の事実気づかずに、強いられる欲望に甘んじるとするならば、それは本来、様々な「可能性」の原基たるべき欲望にとっても「不幸」なことであろうが、しかし、より根本的な危機としては、もしこのまま、コマーシャリズムによって誘導せられた欲望を満たすために、現体制内における様々な抑圧や不如意に耐え、「商品」としてディスプレイされた享楽を消費することで満足を得るという状態に違和感を抱かないで行くとすれば、それは欲望の解放の「保障」という建前において、より抑圧を強化され、管理が徹底化されても、それとして実感されない事態を招くことになる。それどころか、現にある私生活の「保障」のために、その私生活を脅かしかねない存在は「異物」として排除してもらおうべく、むしろ「力=国家」の強化をこそこいねがうという倒錯した心情が醸されてくるであろう。

かくも無自覚かつ柔順な、扱いやすい均質人間が増殖した暁には、いかなる政治体制が帰結されるかは自明である。この問題に関しては、先年亡くなった藤田省三の、特に70年代半ば以降、晩年に至るまでの一連の作品（特に『精神史的考察』、『全体主義の時代経験』[『藤田省三著作集』第五巻、第六巻、みすず書房、ともに1997年]）が示唆に富むが、最近の論考では、特に今世紀に入ってより激変した内外の情勢をふまえた斉藤貴男『安心のファシズム』（岩波新書、2004年）を参照のこと。

- (6) 同時代に喧伝された「幸福」からの隔絶に直面し、苦悶しつつ彷徨った若き魂の系譜を求めれば、それは大正後期、教え込まれた「赤子」像の虚実を告発し、かの安田善次郎を暗殺した朝日平吾や、昭和のはじめ、時の蔵相・井上準之助らを襲った血盟団事件に連座した農村青年たちの「呻き」へと、その續をつなぐことをうる。この点、本稿は、昨今の「宗教論」を内在的な場から問い質すことを目的に草されたものだけに、本文中に組み込むことはなかったが、件のカルト教団をとりまく実存のありようは、原理的に、明治末期以降のいわゆる「自我の問題状況（橋川文三『昭和維新試論』、朝日新聞社、1984年）」に遡及しうる問題であることを強調しておきたい。
- (7) この点、件のカルト教団に奔った人々より上の世代においては、現実変革の希求を一手に引き受け、人間と社会の新しいヴィジョンを提示しうるものとしてはマルクス主義が有効性を保っていたといえる。現在、マルクス主義がその座を追われて久しいことは周知のとおりであるが、その「欠」を何が埋めうるか、埋めるべきなのか、この点は、重大かつ深刻な、現代日本の思想的課題といわなければならない。
- (8) 現在、書籍、雑誌ともに、現代の諸問題を射程に入れた「宗教論」は枚挙にいとまがないが、その代表的かつ典型的な議論を示すものとして、山折哲雄の論集『さまよえる日本宗教』（中央公論社、2004年）を参照。

なお、議論の前提として、そもそも「現代において宗教なるものが必要なのか」という問いが投げかけられると思われるが、この問題に対し、筆者の見解を示しておきたい。

およそ現代を「危機の時代」として把握する全ての人にとり、ニヒリズムに抗しうる超越的批判原理をどう復権させるかという問題は、喫緊の思想的課題として共有されるはずである。その場合、いかなる理念の現代的再生を目指すかは、議論の分かれるところであるが、思想的立場のいかに問わず共有すべき枠組みは、すなわち、理念の復権は宗教の復権と相即不離の関係にあるという観点にほかならない。

たとえば「人間愛」という理念一つをとってみても、それを究極的に担保するものは、被造物としての人間観、およびイエスの贖罪死という宗教的事実であることは言うまでもない。然らば件の理念を産みかつ支える礎石としての宗教と切り離し、理念それのみを単独で復権させようとすることは、抽象的かつ不毛な試みだと言わなければならない。

現代日本の精神的位相と宗教の課題

現代日本の知の状況下、現実を規矩しうる価値や理念に関しては、多くの人々がそれを宗教とは無縁に構想しうるし、またそうすべきであると考えている。しかしこれは大きな思い違いである。虚無に腐蝕された現代という時代の只中に、理念の復権を試みるためには、件の理念を産みかつ支えるところの形而上的確信、究極的には宗教という超越の世界観が必然的に要請される。その意味で、「現代において宗教なるものが必要なのか」という発問は、それが単なる無知でなければ、ニヒリズムの肯定と紙一重である。

- (9) 当該部の表現には、微妙な問題が含まれていることはいうまでもない。というのも、「超越」なるものに「我々がかかわる」という言い方は、信仰の現実を言い表したのものとしては厳密ではなく、より適切には、「超越」なるものが人間に対向するがゆえに、我々は、かかる存在と向き合おうと言うべきであるからである。本稿ではその趣旨にしたがって、件の箇所を「一般的」な表現にとどめたが、別の観点からする起稿であれば、当然、より込み入った書き方となったであろうことを付言しておく。
- (10) この「限界意識」について、鈴木範久『「代表的日本人」を読む』（大明堂、1988年、特に終章175～176頁）から大きな示唆を受けた。
- (11) 「神学的実存」と「預言者的実存」の重要性に関しては、前掲・千葉真「宗教と政治」（『二十一世紀と福音信仰』、教文館、2001年、168～169頁）を参照。この言葉も同書の表現に基づくものである。

参考文献

- 小原信『孤独と連帯』（中公新書、1972年）
竹内啓『無邪気で危険なエリートたち』（岩波書店、1984年）
橋川文三『昭和維新試論』（朝日新聞社、1984年）
藤田省三『精神史的考察』（『藤田省三著作集』第五巻、みすず書房、1997年）
同『全体主義の時代経験』（『藤田省三著作集』第六巻、みすず書房、1997年）
鈴木範久『「代表的日本人」を読む』（大明堂、1988年）
千葉真『二十一世紀と福音信仰』（教文館、2001年）
村松晋『三谷隆正の研究 信仰・国家・歴史』（2001年、刀水書房）
斉藤貴男『安心のファシズム』（岩波新書、2004年）
山折哲雄『さまよえる日本宗教』（中央公論社、2004年）